岐蘇路

岐蘇路

田杉競

昭和六十三年七月二十五日印刷発行

『岐蘇路』

非売品

著者　田杉　競

〒612 京都市伏見区深草願成町一二

印刷者　前田政昭

印刷所　㈱前田グラフィック・アーツ

〒605 京都市東山区一ノ橋野本町四三

岐

蘇

路

はしがき

今までいろいろの機会に書いてきたものをまとめたのがこの随想集である。私が多方向の趣味をもち、文章を書いたり、写真をとったりしたので、内容はやや、雑然としていると言えよう。

私の生れ故郷から始め、多くの先生、友人のお世話になったことを語った。そして私がライオンズ・クラブに入り、京都、滋賀、奈良の地域のガバナーを勤めたのも、私自身が一通りの人間として生きていけるのも、両親、友人、地域各方面の人々のおかげであるから、他方、社会の人々に奉仕をすべきだと考えたからである。社会はもちつもたれつで成立している。

ただ野尻山荘のことに触れ、内地や海外旅行記に多くのページを割いているのは、これから旅に行かれる方々の参考になると考え、私のメモを基にして書いたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本は何か書く意味がなければ出すべきでないというのが私の考えである。単なる自己満足では意味がない。その点からいえば本書は若干問題があると見えるかもしれない。

この小著の原稿の浄書をしてくれたのは長女の岡田邦子であり、印刷出版を担当して下さったのは、前の「素描集」を出して下さった前田政昭氏である。この二人のご労苦がなければ小著は成らなかったであろう。記して深く感謝の意を表する次第である。

八十才を迎えるにあたり

田杉　競

一九八八年六月

目次

第一部　信州と私
信州…木曽の生れ／3
第二部　わが師、わが友
わが師を語る／9
京都アメリカ・セミナーの思い出／11
フリッツ・マクルップ教授／14
竹馬の友　吉村三郎君／18
志賀高原の中村正文さん／21
謝坤蘭君／25

第三部　随　想

雪の魅力、雪とのたたかい／31
野尻の秋／34
趣味のいろいろ／36
素描集にそえて／39
芸術のたのしみ／42
三〇〇坪の庭作り／47
リゾートで豊かさを／49
スキー歴／52
スキー遍歴／54
山菜料理のいろいろ／57
野尻にも象がいた／60
雪のさまざま／64
野尻の四季おりおり／72

第四部　ライオンズ・クラブ　―ガバナーの一年
東パキスタン難民の救済を／77
国際ＡＣＴの確認／82
ガバナーズ　レター／85
国際ＡＣＴ追跡調査の一行印度より帰朝／87
日本人は恵まれているラーマン首相夫人にも会見／93
第一回救援物資輸送／96
ガバナー一年を顧みて／104

第五部　旅の思い出
汽車の旅・電車の旅／115
十和田湖と奥入瀬川／117
東北・北海道旅行／119
大峰登山記／121

ヨーロッパ旅行（一九六三年）／124
ヨセミテ渓谷の美／144
ウィーンの思い出／148
カナディアン・ロッキーズの旅㈠／152
カナディアン・ロッキーズの旅㈡／157
ニューオルリーンズからメキシコ・ピラミッド巡り（一九七五年）／165
スペイン旅行（一九七八年）／175
附　海外渡航歴／181

第一部　信州と私

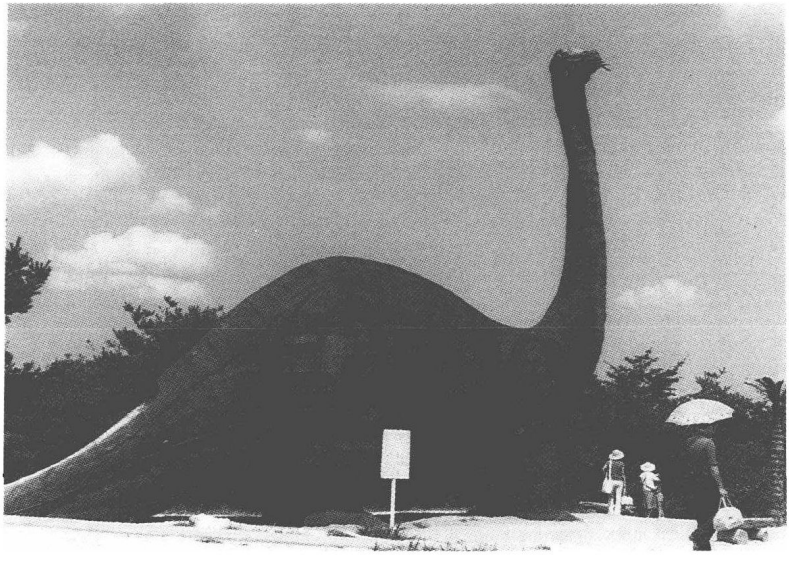
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

信州木曽の生れ

私の本籍は京都になっているが、出生地は長野県木曽郡楢川村である。民営化されたJ・Rの前は国鉄、その前は鉄道院であったが、私が生れた明治四十一年に父は鉄道院の役人で中央線の建設の仕事をしていた。中学に入学した頃、たまたま父が職員パスで中央線に乗せてくれた。

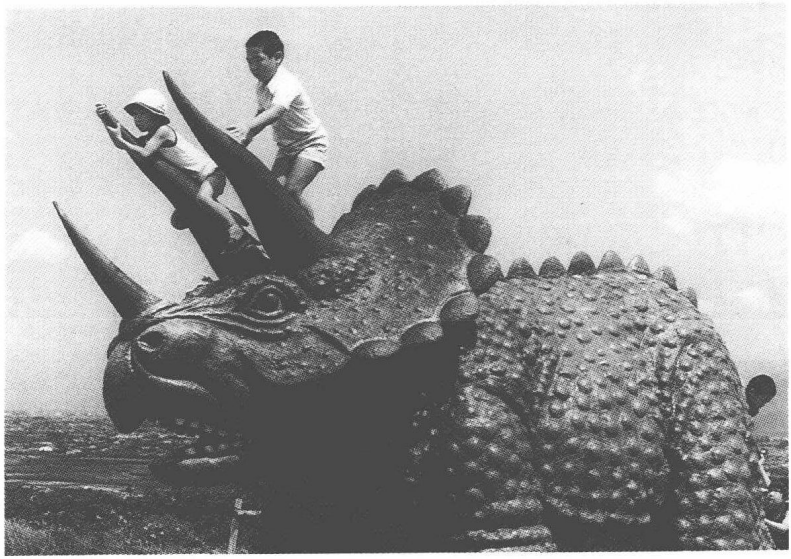
贄川駅付近で、ここがお前の生れた処だと教えてくれた。なんでも新婚の両親はそこの庄屋さんの家に住んでいた由。いま中央線を名古屋からゆくと木曽川がだんだん細くなり、鳥居峠のトンネルを越えると線路沿いに川が北流して奈良井川（信濃川の源流のひとつ）となる。だから鳥居峠は分水領である。庄屋さんの家はその後どうなったか知るすべもないが、いま贄川駅付近には贄川関所跡が東側に見える。

当時父の上司の島崎さんという方が父と同郷の静岡県富士市の出身で、私が生れたとき名前を付けてやろうと珍らしい「競」という名を選んでくださった。おかげで時々「何と



読むのですか」と聞かれる。何でも平家物語に「渡辺競」という人物が出てくるそうだが、島崎さんがその事を知っておられたとすると、学があった方だなと思う。私は木曽路の生れをもぢって「競」の名を付けて下さったのではないかと考えたのだが。

話がとぶが、終戦後ＮＨＫのお寝み番組に「私のふるさと」というのがあって、私が文章を送るとアナウンサーが読んでくれた。そこで信州で生れ、松本、千葉県（上総湊）神戸、京都と移ったら、どこを「ふるさと」というべきか、生れた処は信州、小学校以来長く育った処は京都となるなどと漫談原稿を書いて、そのとき木曽路をもぢって「競」と名を付けたのではないかと



島崎さんにおたずねしたら「そうだ」という返事を戴いた。

戦前からスキーを始め、志賀高原へは三十回位行っただろうか、その頃中央線で木曽路を通るたびに、別荘を持つなら長野県にしたいと思うようになった。そして二十年前に、野尻高原へ別荘を持つようになったが、今では年に数回、多い年は十回ぐらい山荘通いをしているのである。

中央線には、寝覚の床、姥捨の田毎の月が有名だが、姥捨から下方に川中島が見渡せるのと、篠ノ井の西にある恐竜公園がなかなか面白い。恐竜公園は、長野市南郊の山裾にあって一時恐竜ばやりの頃、地すべり地帯に多数の恐竜の模型を作ったのであ

る。カナダのカルガリーの公園とは規模においては及ばないが、それでもかなりの数の模型がある。夏休みは長野からバスが増発しているので一見をおすすめする。

木曽といえば、JRの広報誌「L&G」（レディス&ジェントルメン）一九八八年六月号（涼感美味特集）に、貝原益軒の著「岐蘇路記」というのがあり、木曽福島は「木曽山中にかぎらず信濃にてもっともよき町なり」と記してあるとのこと。そして木曽福島のくるまやのそばが紹介されている。

私も木曽福島で途中下車して市内見物をし、くるまやのそばを賞味したのである。

この随想集に岐蘇路として書名をつけた次第である。

第二部　わが師、わが友

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com